

## ニューヨークでの保育園・幼稚園選びの経験

宝月理恵

(大学非常勤講師)

新型コロナウイルスの感染拡大で外出自粛が強く求められた春の連休中に6歳の誕生日を迎えた息子は、生後6か月から13か月までお茶の水女子大学附属いずみナーサリーに通っていた。後ろ髪を引かれながらナーサリーを離れたのは、

夫の住むニューヨークに移るためである。ニューヨークでのウイルス感染の広がりや混乱を目にすると、かつて私たちが住んでいたニューヨークとは全くの別世界になってしまった感がある。終息はいつになるのか現時点(2020年5月初旬現在)では予想もつかない心苦しさがあがるが、この小稿では、私と息子が過ごしたニューヨーク州ウエストチェスターカウンティで

の幼児教育選びの経験について記憶をたどりながら綴ってみた。なお、私は幼児教育の専門家ではないため、あくまで個人的経験を基にした随想となることをお許しいただきたい。

私たちの住まいはマンハッタンのベッドタウンともいべき緑豊かな郊外にあった。夫は当初マンハッタンの職場近くの高層アパートメントに一人暮らしをしていたが、家族の渡米に伴い、通勤圏内の郊外で新しい家を見つけた。郊外に住めば、車が必要になる。私は運転免許取得の準備を始めるとともに、息子の預け先を本格的に探し始めた。アメリカの教育行政は州ごとに異なるが、ウエストチェスターカウンティ

宝月理恵(ほうげつりえ)

専門は臨床社会学、衛生史。夫の転勤により3度の海外転居を経験。研究と子育てとの両立を模索中。

ではキンダーガーデン (Kindergarten) から義務教育のシステムが始まる。通常小学校に併設されたキンダーガーデンには5歳児が入学するが、それまでは、プリスクール、ナーサリー、デイケアセンターと呼ばれる日本の幼稚園・保育園相当の教育・保育施設がある。なお、キンダーガーデンは無償で提供される義務教育であるが、プリスクール、ナーサリー、デイケアは基本的に営利目的の私立 (Private) であり (教会系など例外もある)、教育費も日本と比較すると高額となる。そのため、キンダーガーデンに入るまでは親族間で乳幼児の面倒を見るケースも多く、高所得層にはベビーシッター (ナニー) という選択肢もある。

さて、息子の預け先選びは難航した。私はいくつか締切りのある原稿を抱えていたため、週2〜3日でも自分の時間を確保する必要があった。また集団保育の利点もあると考えていた。まずは当時の息子の年齢 (1歳) でも入ることができるデイケアやナーサリーを探し出し、い

くつか見学して回った。自宅の一部で乳幼児を預かるホームデイケアも見学した。結局、渡米後3か月にして、複合オフィスの一角にあるチーン系のデイケアセンターに預けることを決めた。決め手となったのは、ディレクターの対応と規約や運営方針の明確さにあったが、しばらく手探り状態での消極的な選択だった。

そして、その迷いは息子にも伝わったようだった。数時間の慣らし保育が始まったが、息子は慣れない環境に驚き、戸惑い、泣いてばかりいた。泣き疲れて汗をかいた姿に、連れ帰るときは罪悪感にかられた。先生の様子 (当然ながら「外国人」である)、飛び交う言語、教室の雰囲気などすべてが彼の目には新奇なものに映ったようだった。まだ言葉が出ない息子にとっては、不安な気持ちを泣いて表すことしかできない。私も昼寝の時間 (nap time) に靴を履いたままベビーベッド (crib) に寝かされる子どもたちを見て、カルチャーギャップを強く感じた。細かく年齢区分があり、数か月ごとに進級する

(move up)ことや、先生の入替わりの激しさも、息子と先生との愛着関係の形成を困難にしているように感じられた。さらにデイケアで提供されるランチやスナックにも驚かされることが多かった。シリアルやパンケーキ、マフィンなどが紙皿で提供され、残された食品は紙皿ごとゴミ箱に直行だった。

デイケアに通わない日は、自宅近くで開催されていた日本人の先生による親子教室に参加した。ここでは日本語の歌や手遊び、絵本の読み聞かせや工作が行われており、息子は楽しく通った。またウエストチェスターには日系幼稚園があり、そこでも未就園児を対象とした親子教室が行われていることを知り、少し遠いが参加してみることにした。見ず知らずの場所に連れてこられた息子は、デイケアの朝のように自分だけ置いて行かれるのではないかと身を固くして私にしがみついていたが、しばらくして私が一緒にいるとわかると、安心しておもちゃに手を伸ばし遊び始めたことを今でも覚えている。

現地のデイケアと日本語の親子教室とに並行して通う日々が続き、次第に言葉を発し始めた息子は自己主張もし始めた。それは明確なデイケアの拒否であり、私はいつそう葛藤することになった。現地のデイケアはインターナショナルな環境でアメリカの言語と文化を経験する場であるとともに、親にとってはフレキシビリティが高いことが魅力であったが、明らかに息子は日系幼稚園を好んでいるようだった。2歳を過ぎ、デイケアで周囲の子どもたちが次第に英語を話しだす中で、日本語を母語とする息子は意思疎通に不自由さを感じていた様子で、朝の出勤時間には行き渋り、園ではおもちゃをシェアできずお友達にかみついでしまう事件も起きた。お迎えの時間にはけろりとしていたことも多かったものの、悩んだ挙句、私は意を決して日系幼稚園の入園手続きを済ませ、息子を転園させることにした。

結果として、日系幼稚園での数年間は母子にとって素晴らしい経験となった。40年の歴史を

もつその園は、ニューヨークという異国で日本語による日本文化に親しむ保育を提供することをモットーとしていた。すでに親子教室に通っていた息子は、初日こそ泣いたけれども、馴染むのに時間はかからなかった。ハロウィン、感謝祭、クリスマスといったアメリカの文化はもちろん、お正月の餅つき、ひな祭り、夏祭りなど日本の文化にも親しむことができた上に、海外では手に入りにくい日本の図書の貸し出しもあり、息子が喜んで通う姿に私は胸をなでおろしていた。特に息子が楽しんだカリキュラムは「わんぱくタイム」と名付けられた月1〜2回

のお楽しみである。普段は年齢ごとにクラス分けがなされているが、わんぱくタイムの日は、各教室がそれぞれの主題をもったテーマパークとなり、子どもたちは年齢や教室に縛られずに非日常の異年齢保育を体験できた。例えば、先生が点てたお抹茶を頂く部屋、新聞紙をビリビリと思いきり破いて新聞紙プールを作る部屋などである。毎回いろんなテーマの部屋があり、

子どもたちは縦横無尽に部屋を移動してさまざまな遊びを謳歌していた。わんぱくタイムのあった日は、決まって迎えの車の中でぐっすりと眠ってしまった。四季の移ろいが美しいニューヨークの豊かな自然の中で、まさに伸び伸びと遊びを経験することができたのだった。

以上、きわめて個人的で主観的なニューヨークでの幼児教育体験談を書き綴ってきた。この経験の中で私が学んだことがあるとすれば、それは幼児であっても自らの居心地の良い場所を選ぶ権利がある、ということである。現在もおしゃべりな息子は、言葉を発する以前から、自身の理解できる言葉で話したいという欲求を募らせていたのかもしれない。そして彼が理解できる言葉で毎日楽しく安全に遊ぶ場を確保するということが、いかに大切であるかを思い知らされた。現在は日本に帰国しているが、息子の居場所を求めて逡巡した日々は、今では懐かしい思い出である。